

発行人

高木ピアノサービス

六六二・〇九六一
西宮市松下町七・四六
電話・FAX



あけまして おめでとうい
ざいます。
「高木ピアノサービス」の
お客様には、このニュース
レターをもって新年のご換
拶とさせていただきます。
さて、今回、毎年恒例のよ
うになっている、海外のピ
アノ工場視察について記事
を書いていきます。訪れた
ピアノメーカーは、世界3
大ピアノメーカーの一つ、
オーストリアの「ペーゼン
ドルファー」とヨーロッパ
では最大の生産量を誇るチ
ェコの「ペトروف」です。
本来、数年前に行くつもり
でしたが、諸事情があり行
けませんでした。今回、ヤ
マハがペーゼンドルフアー
を買取り、絶好のチャン
スとなりました。

き、「今さら、何でヤマハ
が??」と思っていました。
日本人の調律師なら、きつ
と、こう思っていたはずで
す。そして、「あのペーゼ
ンドルフアーはどうなるん
だろ?」「ペーゼンドル
フアーの人間はどう思っ
ているんだろ?」といくつ
もの疑問を抱えていたの
で、とても、タイミングの
良い訪問となりました。



今年もよろしく
お願いします
二〇一〇年一月



合流することにした。
(女史は関東在住)
* ペーゼンドルフアー
以下、ペーゼン
10月25日
伊丹空港から、成田→コペ
ンハーゲン経由でオースト
リア ウィーンに入る。伊
丹空港で飛行機に乗ったの
が朝8:00で、ウィーンに
着いたのが夜の9:45分。
これに、7時間の時差が加
わるので、ホテルに着いた
頃には、もう何時間起きて
いるのか分からないがへと
へと就寝。
この日の晩は、ペーゼンの
工場で働いている日本人と
夕食の約束をしていたので
市内の繁華街で待ち合わせ
をして、彼の行きつけのお
店で食事をする。お店はホ
イリゲ」と言っていて、ワイ
ンと家庭料理を出す居酒屋風
レストラン。ここでは、ウ
ィーンに来たならと、ウ
ィーンのとんかつ、ウイナ
ー・シュニツェル」を注
文。前回来たときも食べた
が、やっぱり、とんかつで
す。こうして、明後日、訪
問する工場での再会を約束
してお開きとなる。



ホテル「ガブリエル」

10月26日
この日を逃すと、ウィーン
市内の観光を逃すことにな
るので、早速、朝から街へ
繰り出す。大通りを経てリ
ング内へと向かう。いくつ
かの路地を抜けると突然、
シュテファン大聖堂の前に
出た。そう言えば、何年か
前にもウィーンは来たこと
があり、突然、その時の事
を思い出した。確か、前回
来たときにも、南側にある
塔が修理の作業中だった記
憶がある。しかし、また、
終わっていないようだ。
午後から博物館を見学した
が、どこの国でも似たよう
なもので、あまり印象的な
ものはない。ここを出ると、
向かいの広場で軍隊のお祭
りがあり、戦車や迫撃砲、
軍用ヘリコプターなどが展
示されていて、それはたい
そう賑わっていた。
この日の晩は、ペーゼンの
工場で働いている日本人と
夕食の約束をしていたので
市内の繁華街で待ち合わせ
をして、彼の行きつけのお
店で食事をする。お店はホ
イリゲ」と言っていて、ワイ
ンと家庭料理を出す居酒屋風
レストラン。ここでは、ウ
ィーンに来たならと、ウ
ィーンのとんかつ、ウイナ
ー・シュニツェル」を注
文。前回来たときも食べた
が、やっぱり、とんかつで
す。こうして、明後日、訪
問する工場での再会を約束
してお開きとなる。

10月27日
今日は、いよいよ「ペーゼ
ン」の見学。朝9:00過ぎ、
ペーゼン側の人が迎えに来
てくれる手はずになってい
るので、ホテルのロビーで
待つ。(海外では、迎えるに
来て貰えるは、とても嬉し
い)
名刺交換をして挨拶を済ま
せ、車に乗り込む。10分か
15分車で走ると、ショール
ームへと到着。数台展示し
てあるピアノを弾き、色々
と質問をしてみる。高木の
中では、ヤマハがペーゼン
のオーナーになったことに
ついてどう思っているのか
が一番の焦点。すると、そ
の回答は意外なものだっ
た。
以前のオーナーは、銀行系
の投資家だったが、それ以
前にも、数回、オーナーが
変わっていて、今回、ヤマ
ハがオーナーになったこと
は、「ピアノを造っている
会社だから好ましい事だ」
と説明を受けた。ん、こ
ういう解釈もあるのかと納
得。
ショールームの見学が終
ると、市内にある旧工場と
本社事務所を見学すること
にする。この建物は、近い
うちに処分すること
で、処分される前に来られ
たこともグッドタイミング
だった。工場内を見学して
いると、工具が展示されて
あったり写真が展示され



学友会館

りして、昔からの重み
を感じさせてくれる。選定
室に通された時、一人の日
本人と出会った。京都の楽
器店で働いていて、「こ、ハ
ーセン」に入社することが
夢だったと話してくれた。
「夢は持たないかな、夢
は叶った」と素直に思っ
た次第だった。
旧工場の見学を終えると、
再び、午前中に行ったショ
ールームへと戻ってきた。
ここからは、ペーゼンの計
画で、ウィーンフィルの
本拠地「学友会館」のプラ
イベートツアーに参加でき
ることとなった。毎年1月
1日に開かれるニューイヤ
ー・コンサートの会場だ。
色々と説明を聞いてい
ると、ガイドさんは学友会館
の職員として、とても誇り
をもって仕事をしているこ
とがうかがえた。そして学
友会館のガイドツアーも終
わり、この流れでオペラハ
ウスへと向かう。オペラハ
ウスでもツアーを申し込ん
でみた。日本語のガイドを
申し込んでいたので参加者



ペトロフ本社工場

は全員が日本人。ツアーが
始まり、その舞台裏や裏方
として働いている人達を見
て、音楽の都として歴史の
深さや重みを感じさせてく
れます。オペラファンやク
ラシックファンなら、涙流
して喜びそうな所ですが、
何か薄暗いホールで、個
人的には有名なわりには「こ
んなもんか?」って感じ
でした。それでも、初めて
訪れるなら、街なかでの「ザ
ツハトルテ」と共に、一応
はこなしでおきたいメニ
ューですね。



ペーゼンドルフアー工場前

ザツハトルテ
濃厚な味わい特徴とする
ケーキで、チョコレートケ
ーキの王様と称される。

10月28日

今日は今回最大の目的、ペ
ーゼンドルフアーの工場見
学。工場へは国鉄QBBを
使って、「ヴィーナー・ノイ
シュタット駅」まで行って
後はタクシーに乗る。高木
は、街中で教会や博物館を
見るよりはるかにテンショ
ンが高い。到着してタクシ
ーから降りると建物の壁に
「Bosendorfer」
の文字が。「やった、
ついに来た」って感じて
いた。

工場内をつぶさに見て回
る。頭の中では、数年前、
ハンブルグにあるスタイン
ウェイの工場と比較しながら
見て回っている自分がある
ことに気が付く。この工場

見学で感じたことは、材料
の選定から仕上がりなど
は、世界一を感じさせる。
「調律師として技術者とし
てこのピアノを扱ってみた
い」と感じさせる「アノだ
こうして、2時間近い感動
の工場見学を終え、記念写
真を撮って工場をあとにし
る。
事件はここから始まった。
ここまで乗ってきた同じタ
クシーを呼び、駅まで帰ろ
うとする、なんと、この
町の繁華街まで連れてこら
れてしまった。「町中を見
ていけ」の意味が、それと
も、一般の観光客と間違わ
れた(ま、一般の観光客
だけ)か。とにかく、
気持ちを入れ替えて、この
町でお昼ご飯を食べる事に
した。うろろろしたが、町
自体はそんなに大きくない
ので、賑やかなところはこ
く一部だけ。結局、タクシ
ーで降ろされた近くの、小
さなレストランに入った。
まだ、日替わりランチがあ
るとのこと。そのランチ
を食べることにした。

りを聞くことにするが、英
語が通じない。店内にいる
会社帰りのおじさん達が、
「あ、だこ、だ」と騒いで
いるが、背広を着た一人の
男の人だけが、英語を話せ
るようで、この紳士に駅ま
での行き方を教えて貰っ
た。レストランを出て歩き
始めるが、なかなか、説明
通りの道もなく、通りすが
りの学生に聞いたが、片言
の英語ではよく分からな
い。(お前の英語が片言だ
らうと、ツッコミが入りそ
うだが、ちゃんとした英語
で通訳が聞いている)歩き
ながら、数人に聞いて、や
つと駅にたどり着く。こう
して、ウィーン市内に戻り
シエーンブルン宮殿を見学
してホテルに戻る。



シェーンブルン宮殿

10月29日
今日はチェコへの移動日。
ウィーン南駅から国鉄に乗
ってプラハへと向かうが、
ウィーン南駅でたまたま
落とし物を教えてあげたこ
とから、一人の日本人女性
と合流してプラハへと向か
うこととなった。学生かな
と見ていたが、電車の中
で事情を聞いてみると、大
阪の会社に勤める20代の会
社員だった。何でも、プラ
ハからウィーンに来て、そ
の帰りだから、我々とは全
く逆のコースようだ。それ
にして女性一人で海外に
来るなんて頼もしい女性
だ。
こうして、ウィーンから約
4時間の旅を終え電車から
降り、乗り換えのため地下
鉄へと向かう。まず驚いた
のは、エスカレーターが異
常に速い。日本の速度の2
倍はある。上りはまだ
まじだが、下りは、一歩踏
み外さうものなら転落しそ
うで恐ろしい。それに信号
機の切り替わりの早さ。横
断歩道では、赤信号から青
信号に替わると、いきなり
「チチチチ」と音を立て
てせき立て、道路の半分も
行かないうちに赤信号。少
し迷ったが、無事トラムに
乗ることができてホテルへ
と到着。
まずは、ホテルの周りを散
策と決め込んでウロウロと
する。ホテルの横には少し
小高い丘があり登っていく
と、街全体が見渡せる場所
まで来た。少し遠くにプラ
ハ城も見えるが、ここまで
登ってきたら、もうへとへ
となので、帰りは、駅で買
った乗車券が使えるロープ
ウェイで下りてきた。
*プラハでは、地下鉄、市

電、バスの切符は共通で、
時間券として売られている
ここ辺りでチェコらしい食
事をしようと言つことにな
り、それらしいレストラン
に入った。料理は、魚・羊・
鴨肉とパドワイザー・ピル
を注文した。あるチェコ人
から、「チェコのビールは
世界一うまい」と聞いてい
たので、ビールを注文した
が「ピルメニュー」には、パ
ドワイザー」と書かれてい
る。ここまで来て、「パドワ
イザー」を飲むか?と思
いや、アメリカのパドワイ
ザーとは違うと言っていた
ので、パドワイザー・ピル
となった。
食事を済ませ、川沿いを歩
きカレル橋へと向かう。お
ー、これがカレル橋。かと
思いながら渡っていたが、
橋の片側半分は工事中のた
め閉鎖されていて、とても
残念でした。橋を渡りき
たところが旧市街地。ここ
には、夜の7時を回ってい
るにもかかわらず、たくさ
んの人が繰り出して、た
ざざと見送るところで、
ホテルへと戻る。

10月30日
今日は、念願のペトロフ社
への訪問日。ペトロフもペ
ーゼンドルフアーと同様、
いくつもの質問を持っての
訪問なので、期待は高まる。
ペトロフは、プラハから車
で約2時間のポーランド国
境に近いフラデツ・クラロ
ベにあるので、ペトロフ社
から迎えに来て貰える約束
をしている。約束の時間は
8:30だが、時間になって
も現れない。ヨーロッパ時
間なら30分くらいは待つ
もりだが、今日まで、日本
の代理店とは交渉したがペ
トロフ本社との交渉はして
いない。「来なかったらど
うしよう」と思っていた矢
先にお迎えの車が到着した。
運転手はペトロフ一族らし
い。が、英語が話せないら
しく(会話は成り立たない
し)こちらでもチェコ語は話
せないし)ホテルを出発し高
速道路を走ること約2時間
でペトロフ本社に到着し
た。ペトロフ本社を見て第
一声「スバシーバ」と言
うと運転手は思わず笑った。
チェコは共産圏時代もあ
り、ロシア語も理解できる
ようだ。
担当者(名刺を交換して工
場内を案内して貰う。実際
には、担当者は涉外担当の
ようで工場長も一緒に付き
合ってもらった。英語で質
問すると、担当者がチェコ
語に訳し工場長に伝える。
すると、工場長がチェコ語
で担当者に伝え英語に訳
す。ペーゼンドルフアーで
は、ドイツ語が公用語だが
英語の話せる人も多かつ
た。が、ここチェコでは、
ある程度教育を受けた人が
英語を話すようだ。
工場内は休暇を取っている

者も多く、アップライトピ
アノの製造は殆ど止まって
いたが、高木にとっては、
最近、質の低下が噂され
る中、その材料から製造工程
を見ることに大きな意義が
ある。どこの企業でも経営
の合理化が問われ生き残り
に必死だ。ペトロフも同様
で5つあった工場も1つに
なり、従業員も二千五百人
から二百人へと大きく縮小
している。しかし、ピアノ
造りへの情熱は失っていない
ようで安心した。はるば
る、日本からやって来た甲
斐があると言つものだ。そ
の後、担当者(近くのレス
トラムで昼食を共にして帰
路についた。とても満足し
た一日であった
その後、10月31日、チェス
キークームロフを堪能して
コペンハーゲン経由で11月
3日に帰国
本日はこの2倍くらいの記
事がありますが、紙面の都合
上かなりの文章をカット
しました。興味がある方は
直接、高木までお問い合わせ
下さい。